



2011年は東日本大震災で始まり終わった感があるが、同時に起きた福島第一原発事故によって原発の存廃の是非が現在進行形で議論されてきた。正確な情報が発信されない状況の中で、政府や東京電力に対する不信感が増幅され、また、北海道電力、九州電力のやらせ問題も表面化し、地方自治体の関与も疑われている。そういった混沌とした状況の中で、2012年は原子力発電、放射能に関する正確な情報に基づいて、今後の日本人の生き方を考える契機之年としなければならない。

## 生き方のターニングポイント

情報広報部

橋本 洋一

原発事故を「絶対に」二度と起こさないようにすることが可能であるのか、可能でないならば、原発の方向に舵をきらざるを得ないが、原発を実現するためにわれわれの生活がどのように制約されるのかを知る必要がある。産業革命により地球上の人口は急増し、昨年末ついに70億人を超えた。消費面からみた地球という天体での最適な人口は5億人が上限であるらしい。また、昨年の道医創立64周年記念講演をされた北大教授坂本尚義先生から、その後の懇親会で大変興味を引くお話を

お聴きする機会を得た。生物はエネルギー代謝と自己複製の2点で定義されるらしいが、生命の元であるアミノ酸は地球由来ではなく、外来（水星が最も考えられる）由来である可能性が高いことが、地球の兄弟である月の研究で分かってきたらしい。「先生、地球は今後51億年くらいの寿命というのは本当ですか？」「ええ、地球はですね。…人類ではないですよ」意味深長な言葉が先生の口から出てきた。地球温暖化の主たる犯人は人類であることはほぼ疑いないとの結論が出ており、南アフリカのダーバンで開催されたCOP17で2012年末に切れる京都議定書の継続とCO<sub>2</sub>の大排出国である中国、米

国を含めた新しい枠組みを2020年までに発効することが決定された。各国の利害や思惑があつてなかなか実効のある取り決めができないことがまたもや明らかになった。もっとスピード感のある決定がなされるべきであるのに、差し迫った危機感が伝わってこない。東日本大震災が発生して10カ月も経過した現在も、復興庁が立ち上がっていないスピード感の欠如に似たものを感じる。経済成長が右肩上がりでも持続した時代に、人類は自分たちの生活形態を優先するために、食物連鎖の頂点に立つて消費をし続け、

地球の環境を破壊してきた。しかし、持続可能な世界を構築するために、今までの価値観を180度変更するくらいの覚悟が必要とされる。昨年、来日されたブータン王国の国王の父上が30年以上も前に「自らの身の丈に合った、成長の実現」に取り組まれた。その結果として「国民総幸福度 (Gross National Happiness: GNH)」という考え方が生み出された。九州とほぼ同じ国土面積を有し、人口70万弱の農業国ブータン王国で97%の国民が幸福であると答えている。毎年3万人以上の自殺者を出すわが日本国の国民のGNHはどうだろうか？われわれが生き方を転換するためのヒントがブータン王国にあるのではないかと思われる。国王の歓迎晩餐会を欠席して同僚議員のパーティーに駆けつけ、「宮中行事より私にはこちらが大切だ」と迷文句を口にした。宮中で携帯電話を使用するといった常識を逸脱した非礼な閣僚が問題になったが、まさにGDP中心の繁栄を追い続けた現代日本人の落とし子とも言える行動であった。こういった恥ずべき行為を日本国の閣僚が行ったという事実は、日本国が品格を失った国家であることの象徴的な出来事であるとも言える。

今まさに従来の経済成長重視の生き方から、心の底から幸福であることを実感できる生き方に大きく舵を取るターニングポイントにきているのではないのだろうか？と新年を迎えた今、自問している。